
神の使徒

ティラミス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の使徒

【Nコード】

N2799BA

【作者名】

ティラミス

【あらすじ】

暇だからという理由で神の使徒として召喚されてしまった高校生の少年アキラは、願いをなんでも叶えてやるという報酬に釣られて魔王を倒すことを決意する。剣や魔法や金よりも魅力がモノをいう世界で彼はどう生きていくのか？戦闘描写は少なめで、キャラ同士の掛け合いが物語の中心になる予定です。

シーフ始めました（前書き）

初めての作品なので拙い部分が多々ある上に読み難いと思いますが、出来る限り改善していこうと思いますので暇つぶしにでも読んでみて下さい。

シーフ始めました

目の前に中学生くらい金の髪少年が立っているのが見える。

誰だ？このガキは？つーか、ここはどこだ？

ふと横を見ると、同じくらいの年齢と思われる少年少女たちが、自分と同じように困惑した様子で目の前の少年を見つめている。

「困惑しているようだね？無理もない。君たちをここに召喚したのは日本時間で午前4時だったからね。大半の者が寝ていたんじゃないかな？」

召喚って・・・こいつ何言ってるんだ？

そもそも、寝てたところを召喚？したんなら、何で部屋着じゃねえんだよ？

自分や周りにいる者の服装をみると、これからデートにでも行きそうなくらい気合の入った格好の者が多い。

「まずは自己紹介をしよう。と言いたいところだけど、僕に名前はないから、普通に神様とでも呼んでくれ」

「何故君たちなのかというと、あえて言うなら運が良かったところかな？」

「召喚の条件は日本語を話せる10歳以上の異世界に興味を持っている者。その中からランダムで1000人選んだ結果、今ここに君

「たちが居るといふ訳さ。」

「ちなみに、服装は君たち自身が一番気に入っている服を着ているはずだ。さすがに寝巻きのまま召喚するのは可哀想だからね」

「・・・それで？俺たちをどーする気なんだ？」

服装に関しての疑問は解けたが、こいつの目的が分からない。

我慢しきれず自称神に声を掛けてみることにした。

「それは今から説明するよ。いいかい？ここは日本でもなければ地球ですらない異世界ってやつだ。そして君たちの目的はこの世界の何処かにいる魔王を倒すことだ」

「魔王だと？」

「そう。君が想像した通りの魔物を統べる王だ。君たちには馴染み深いんじゃないかな？日本はそーゆーゲームやマンガが多いだろう？」

「まあな。だが、その魔王が危険な存在だってんなら、自分で倒せば良いじゃねーか。お前神なんだろ？」

「別にそれでも良いんだけどね？ちょーど退屈してたし、せつかくだから地球から君たちを神の使徒として召喚することにしたんだ」

こいつ・・・完全に俺らのことおもちゃ扱いしてやがる。

「最初に言っておくけど、命の心配はしなくていいよ。こっちで死

んだとしても、君たちの存在が消滅する訳じゃない。あくまでもこの世界に存在出来なくなるだけだ。もっとも、その場合はこの世界での出来事を全て忘れて地球に戻ることになる」

「なるほどな。命の心配がないって事は分かった。でもこのままじや俺らは失踪扱いされちまうぜ？その辺はどうしてくれるんだ？」

「それについても心配は要らない。クリアと死亡、どちらの場合でも戻るのは居なくなっただのとほぼ同じ瞬間となる。つまり、今すぐ戻っても10年後に戻っても、帰還日時は変わらないってことさ」

おもちゃ扱いに変わりはないが、一応最低限のフォローはあるってことか。

「ついでに言うと、君たちの肉体は成長しないから寿命による死はない。のんびり攻略してくれても構わないよ？その方が僕も暇つぶしになるし」

素直に魔王討伐なんぞしてやる義理はないが、夢にまでみた異世界ライフだ。

寿命が無い上に飽きたら日本に帰れるってんなら、せいぜい楽しませて貰うでしょう。

「さて、ここまではいいかな？次はクリア報酬について話そう」

報酬があるのか？って、そりゃそーだ。報酬もなくわざわざ魔王と戦おうなんて奇妙なやつがいる訳ねーよな。

「クリア報酬は、魔王を倒した者とその仲間の願いを何でも一つず

つ叶えてあげるよ。ただし、願いが重複してたり他の願いと齟齬が生じてしまう場合は、より僕を楽しませてくれたプレイヤーに優先権を与える」

「本当になんでも叶えてくれるのか？」

「もちろん。億万長者になって、一生遊んで暮らすことも出来るよ？」

それは魅力的だな。大金が手に入るなら大学受験も就職する必要もないってことだもんな！

「大体は理解した。だが、どーやって魔王を倒すんだ？俺らは軍人でもなけりや格闘家でもない、ただの学生だぞ？」

「それを説明するにはステータスを見てもらうのが手っ取り早い」

ステータスとは、そりやまた随分ゲーム的なことで。

「念じれば出てくるから出してみたまえ。他人には見えないから安心していいよ」

その声を聞き周りの者たちも次々とステータス画面を出していく。

先程神が言っていたように他人のステータスは透明な板が浮いているようにしか見えないようだ。

「では、ステータスについて説明するよ。表示されるのは名前、ジョブ、レベル、HP、SP、STR、VIT、DEX、INT、AGI、LUC、さらに隠れステータスとしてCHRがある」

「数値としてはこの世界の一般的な住人のHPが50。他は10前後というところだね。」

「他にも装備、スキル、称号、所持金などが表示される」

ふーん。まあ典型的なMMORPGって感じだな。

「職業に関しては、ファイター、ソーサラー、ヒーラー、シーフ、アーチャーの中から一番適正のあるジョブがすでに設定されている」

「ファイターはSTRとVIT。ソーサラーとヒーラーはSPとINT。シーフはAGIとLUC。アーチャーはSTRとDEXがそれぞれ特に上がり易くなっている」

俺はシーフか・・・確かにさっきの5種類の中じゃ一番俺好みだな。

「レベルが上がるとステータスが僅かに上昇し、さらにボーナスポイントが2P貰える。これは君たちが好きに割り振ることが出来る」

運極とか心惹かれるよなあ。レアドロップの確率が上がるかもしれないし。

「こんなところかな？他にも細かいことは沢山あるけど、全部説明してたらキリがないし」

「ステータス画面にヘルプ機能を付けておいたから、あとは自分たちで試行錯誤してみるんだね。それじゃー今からここにいる全員を町にランダム転送するよ」

そう言うのが聞こえた瞬間視界が真っ白になった。

異世界の美少女（前書き）

今回の話を読んで戴けたら、作品の雰囲気は伝わるかと思っています。

異世界の美少女

視界が戻ると目の前に自称神の姿はなく、周りにいた者たちも居なくなっていた。

「ランダム転送って言ってたから、この町のどこかに分散されたってことだろーな。町の1ヶ所に1000人も人間がいきなり現れたら大騒ぎになるだろーし当たり前か」

どうやら俺が立っているのはどこかの路地裏のようだ。

このままここに立ってても仕方がないし、表通りに出ようと思い適当に進んで行くと、じきに大きな通りに出た。

「ふーん。中世ヨーロッパって感じの町並みだな。ファンタジー世界のお約束ってやつか」

木造や煉瓦の家が多く、コンクリート製のビルなんかは影も形も無い。

しかし、道をゆく人たちの服装は俺が着ているのほとんど差異はないように思える。

「なんか文明レベルが良く分かんないな。この格好でも周りから浮かなくて済むのは助かるが」

考えても分からないことは置いておいて、もう一度ステータスを確認してみるか。

アキラ シーフレブ1

HP : 100 / 100

SP : 20 / 20

STR : 16

VIT : 12

DEX : 20

INT : 10

AGI : 25

LUC : 20

CHR : 35 (+17)

装備 : 布の服 (CHR + 2)、金の指輪 (CHR + 10)

スキル : なし

称号 : 神の使徒 (CHR + 5)

所持金 : 1000G

他のステータスはなんとなく分かるけど、CHRはどんな事に、どれくらい役に立つんだ？

神の野郎、マジで最低限の説明しかしてねーな。

ヘルプ機能があるって言うてたし、まずはステータスの使い方をマ

スターするか。

30分ほど色々試してみて、大体の使い方は理解出来た。

「こんなところか。他のやつらを探して情報収集とか仲間集めとかしたいけど、どーすっかなあ」

ソロで魔王を倒せるなんて思えないし、仲間は必須だ。

そして、どーせなら女の子を集めてハーレムパーティを作るのも良いかもしれない。

「とりあえず、仲間集めはメシを食ってからにするか」

神は午前4時に召喚したとか言ってたけど、周りの様子を見るに明らかに日が昇ってからかなりの時間が経っている感じた。

当てもなく通りを進んで行くと、右手にフォークとナイフが描かれた看板が掛かってる店を発見した。

「あつたあつた！この看板は絶対にレストランだろ？」

足早に木製の扉を開いて入っていく。

「いらっしやいませ。お1人ですか？」

俺が入って来たのに気付いた少し年下と思われる（たぶん15歳くらい）茶髪の少女が話し掛けてくる。

「ああ。ここってレストランだよな？」

「そうですよ。兼業で宿屋もやってます」

「なるほどね。とりあえず食事を」

「はい。ではこちらのお席にどうぞ」

時間帯が遅かったからか、待たされることなくカウンター席に案内される。

「こちらがメニューです。決まったら呼んで下さい」

そう言つて少女は厨房に入つて行つた。

「うーん。このブラックベアーの肉つて、どんな味なんだ？ベアーつていうくらいだから、熊肉だと思うけど」

ちょっと不安だがせつかくの異世界だし、地球じゃ食えないもん食わなきゃもつたないよな？

「すみませーん。注文お願いしまーす」

「はーい」

他の席に料理を運んでいたさっきの少女がこちらに近付いて来る。

「決まりましたか？」

「えーっと、パンとブラックベアーの肉で」

「前払いで20Gになりますかよろしいですか？」

20Gか・・・まあ1000Gあるしこれくらいなら問題ないか。

「20Gつと」

やはり店に来る前にステータスの使い方を調べておいて正解だったな。金の使い方が分からないと食事も満足に出来ないところだった。手早くステータスを開いて、トレード画面に金額を打ち込んでゆく。

「はい。ちょうど戴きます。それでは少々お待ち下さい」

厨房に入って行く少女の後姿を目で追いながら、つい妄想してしまう。

めちゃくちゃ可愛かったなあ。

是非とも仲良くなりたいけど、あれだけの美少女だし、俺なんかじゃ見向きもされないだろうな。

ここを拠点にすれば毎日あの子の顔を拝めるし、それだけで我慢するか。

「お待たせしました」

「ごちよごちゃ考えている内に、いつの間にか少女が料理を運んで来たようだ。」

「ありがと。聞きたいことがあるんだけど、今いいかな？」

「はい。なんですか？」

「実は今日泊まる場所を探してるんだけど、ここの宿屋は1泊いくらかな？」

「1泊50Gです。食事は別料金になります」

さっきの料理代が20Gで宿代が50G？料理が高いのか、それとも宿代が安いのかどっちだ？

「今空いてる部屋はあるの？」

「はい。シングルが2つとツインが1つ空いてます」

「それじゃーシングルをお願いしようかな。料金は前払い？」

「はい。もし連泊するようなら纏めて払っても良いですよ？」

確かに一日ずつ払うのはめんどいな。

「それじゃーとりあえず10日分で」

「ありがとうございます。500Gになります」

一気に所持金が半分になってしまったな。でも、この子の顔を毎日見れると思えば安いもんだ。

「俺はアキラ。これからよろしくね」

「リリースです。こちらこそ、よろしく願いします」

やっぱり可愛いなあ。まだ聞きたいこともあるし、もうちょっと話し掛けてみよう。

「あと、お勧めの武器や防具を売ってる店はないかな？」

「そうですね。それなら私がいいお店を知ってますから案内しましょうか？」

・・・これってもしかしてCHRの効果なんだろうーか？

普通初めて会った男の客にここまでしないよな？

「それは嬉しいけど、お店の方はいいの？」

「はい。今はお客さんも少ないし、夜までに戻れば大丈夫です」

「ありがとう。助かるよ」

「私もアキラさんともっとお話したかったので、気にしないで下さい」

やっぱりCHRの効果としか思えない。

今まで何度か告白されることはあったけど、これほどの美少女にデート？に誘われたことなんて一度もないし。

「それじゃー私はアキラさんがお食事している間に着替えてきますね」

「わかった。ここで待つてれば良いかな？」

「はい。お店は近くですから、急がなくて大丈夫ですよ？」

そう言つて店の奥に行くリリスを見送つていると、体格の良い男がふらふらと俺近付いてきた。

「おい！餓鬼！」

「あー？」

男相手に使う愛想など欠片も持ち合わせていない。

ましてや敵意に満ちた目をしてる相手なら尚更だ。

「リリスは俺が半年から狙つてゐる女だ！餓鬼が気安く話しかけんじやねえよ！」

「彼氏つて訳じゃねーんだろ？ならお前にそんなこと言われる筋合いはねーな」

「はっ！やっぱりてめーもリリスも狙つてやがったか！だが残念だったな！リリスは今夜俺の物になるんだよ！」

「どーゆーことだ？」

「へへっ！今夜リリスを俺の家に招待するのさ！」

「リリスが行くつて言つたのか？」

「あの女が自分から男の部屋に行くわけねーだろ？だから薬で眠らせて無理矢理連れ込んだのよ！高い金出して媚薬も買ったからな。一晩で俺がいないと生きていけないカラダにしてやるぜ！」

こいつだしぶ酔ってんな。

リリスが働いてる店の中で誘拐の計画を大声で明かすとか、どんだけバカなんだ？

「お前がバカだってことは分かったから、もう帰っていいぞ？」

「んだところあ！」

叫びながら男が殴りかかってくる。

酔ってるせいもあって足元が覚束無い上にテレフォンパンチなので、目を瞑ってても避けられる。

「そんなもんが当たるかよ。しばらく臭い飯食ってこいや！」

パンチを軽く避け、すれ違い様に男の右顎にストレートを叩き込む。常人以上のSTRのお陰か、男は声を発する間もなく気絶してしまった。

すると、店中から喝采が聞こえてくる。

「一発かよ？すげーな、にーちゃん！」

「速すぎて拳が見えなかったぞ?」

まあスピードこそシーフの命だからな。AGI25は伊達じゃないってところかな?

「おい、にーちゃん!俺は騎士団を呼ぶから、この縄でその馬鹿を縛っといてくれ!」

そう言つて40くらいのおっさんが縄を投げ渡してくる。

「あいよ・・・こんなもんかな?」

てきとーにぐるぐる巻きにしてその辺に転がしておく。

しばらくすると、さっきのおっさんがこちらに近付いてきた。

「娘を攫おうとした男をぶっ飛ばしてくれて感謝する。あいつの家を調べれば色々出てくるだろうから、当分牢の中か、場合によつては奴隷身分に落とされることだろう」

このおっさんリリスの父親だったのか。

・・・あんまり似てねーな。

「まあ女攫つて無理矢理犯そうとしたんだ。それくらい当然だな」

すると、急に黙り込んだおっさんが俺の目をじーつと見つめてくる。

「悪いやつじゃなさそーだし、腕っ節も強い。さっきみたいな男からも娘を守ってくれそうだ。もし娘がお前さんを選んだら、その時

は交際を認めようじゃないか！」

えーっと、これもC H Rの効果なのかな？

まあなんにせよ、父親公認で堂々といちゃラブ出来るってことだ。

「ありがとうございます。精一杯頑張ります」

「期待しているよ。そーそー、馬鹿のせいで料理が冷めてしまった
だろう？せめてもの礼だ。作り直してあげよう」

そう言っておっさんは厨房に戻って行った。

おっさんが料理を作り直してくれるのを待っていると、ちょうどリ
リスが着替えから戻ってきた。

「騒がしかったけど、何があっただんですか？」

「ちょっと酔っ払いが俺に絡んできただけさ。ほら、そこに転がっ
てるやつだよ。気絶してるし、騎士団つてのが来るらしいから問題
ないよ」

リリスは目を見開いて驚いている。

「この人、ずっと私に言い寄ってきてた人じゃないですか！粗暴で
有名なのに、アキラさんがやつつけたんですか？」

「ああ。なんか俺がリリスと話してたのが気に喰わなかったらしい」

「アキラさんって強いんですね！」

「どーだろ？自分じゃ良く分らないな」

リリスが褒めてくれるのに照れていると、料理を持ったおっさんが出てきた。

「待たせたな。今度は冷めないうちに食ってくれ」

「待ってました！そんじゃ改めていただきます！」

うおー！なんだこの肉？めちゃくちやうめえぞ？

「もしかしてブラックベアーのお肉を食べるのは初めてですか？」

俺の反応から推測したのか、リリスが聞いてくる。

「ああ初めて食べた。めちゃくちや美味しいな！」

「あまり出回らない貴重なお肉ですからね。その分お値段がしますけど」

「そーだったのか。ラッキーだったな！」

1Gが100円として考えると、宿代が1泊5000円で、ブラックベアーの肉が2000円弱ってことか。

毎食はきついけど、たまになら良いかな？

とりあえあずリリスを待たせちゃ悪いし、もったいないが今は手早く食べてしまおう。

異世界ショッピング（前書き）

リリスが小悪魔っぽくなってしまったかもしれません。

異世界ショッピング

リリスとのデート（反論は認めない）が待ち切れなかった俺は、1分ほどで食事を終えてリリスと出掛けることにした。

ところで現在のリリスの格好だが、上はキャミソールで、下はショートパンツにニーソックスという格好だ。

さっきまでのＴシャツ＆ロングスカートと比べると、かなり露出度が高い。これは期待しても良いのだろうか？

「まずは武器屋で良いんですね？」

「ああ。そのあと回復アイテムが売ってるところにも行きたいな」
本当に近くだったようで、1分ほど歩くと剣と盾が描かれた看板が見えてきた。

「ここです。私が知る限りこの町で一番品揃えが良いんですよ？」

「へーそれじゃ早速入ってみよう」

わくわくしながら店に入っていくと、20台前半くらいの女性がカウンターの座っていた。

「いらつしゃい。ってリリスじゃない。珍しいわね？それにそつちの男の子は？」

「お久しぶりです。サラさん。今日はこちらの方を案内して来たん

です」

「なーんだ。てっきり彼氏を見せびらかしに来たのかと思ったわ」

「ふふっ。先のことは分かりませんが、アキラさんとは今日が初対面ですよ」

リリースはどっちとも取れる反応を見ている。

「へえーあのリリースがねえ。詳しく聞きたいところだけど今度にしてあげるわ。それでアキラくんだっけ？何が欲しいの？」

普通のお姉さんから商売人の雰囲気変わったのを感じる。

なんだか品定めされてるような気がして若干居心地が悪いな。

「武器と軽い防具を見せて貰えますか？」

「了解。シーフなら武器はナイフが良いかな？」

「何で俺の職業が分かったんですか？」

「そりゃー商人に鑑定スキルは必須だからね。私はレベル低いけど、それでも名前とジョブくらい分かるわ」

なるほど。鑑定スキルはアイテムだけじゃなくて人にも有効なのか。

「ちょっと聞きたいんですけど、鑑定って商人にしか使えないスキルなんですか？」

俺にも使えるなら是非とも欲しいスキルだ。

「いえ、才能さえあれば念じるだけで使えるわよ。スキルだから当然SPを消費するけどね」

「念じるだけで良いんですね？やってみます。リリース手伝って貰ってもいいかな？」

「ちょっと恥ずかしいけど、いいですよ」

リリースをじーっと見つめ、鑑定スキル発動！と念じてみる。

リリース 宿屋の娘LV1

HP：40/40

SP：8/8

STR：9

VIT：8

DEX：13

INT：7

AGI：11

LUC：20

CHR：30（CHR+5）

装備：布の服（CHR+2）

スキル：なし

称号：町一番の美少女（CHR+3）

所持金：300G

おかしいな？サラさんの話と違って、初めて使ったのに全部のステータスが見えるんだけど？

これも神の使徒補正なんだろうーか？

てゆうーか、凄いなリリス！LUC20か。俺が今日たまたまりリスの店に入ってあの男の計画を阻止したのもLUCの効果だったりしてな？

あと予想通りCHRが高い。補正を抜いた数値で25って・・・俺なんて補正を抜いたら18だぞ？

素の状態だったら相手にもされなかったかもしれんな。

とりあえず、全部見えたなんて言って騒がれたら面倒だし黙ってしよう。

「どーやら俺にも使えるみたいです」

「そう、良かったわね。何回も使えばその内レベルが上がって、さらにステータスが見えるようになるらしいから頑張りなさい」

「そうなんですか。色々教えて頂いてありがとうございます」

「気にしないでいいわ。お礼だったら、是非今度ともウチを贖戻に
してちょうだい？」

サラさんが冗談めかして自分の店を宣伝してくる。

「商売上手ですね」

「それでも商人ですから」

サラさんの人柄も良さそうだし、本当に贖戻にしても良いかもしれ
ないな。

「話がそれちゃったけど、アキラくんの予算はどれくらいあるの？」

あーそうか。サラさんには人の所持金までは見れないんだっとな。

「今の手持ちは500弱ってところですよ」

「500かぁ・・・それだと一番安いナイフ1本しか買えないわよ
？」

「え？マジすか？」

「ええ。それだってリリースの紹介ってことでおまけしてあげてだけ
どね？せめて900あればもうちょっといい商品があるんだけどね
え」

「なんてこった」

宿代10日分も前払いするんじゃないかった。そーすれば900Gの

ナイフが買えたのに・・・

どーする？いくらスペックがそれなりに高いといっても、俺はシーフだし、一番安いナイフ一本じゃモブ狩りすら苦勞するんじゃないか？

俺が悩んでいると、ふいにサラさんが声を掛けてきた。

「ねえ。もし良かったらその指輪ちょっと見せてくれない？」

「これですか？」

右手の薬指に填めていた指輪を外してサラさんに手渡す。

「凄いわ！こんなに凝ったデザインの指輪見たことない！それに鑑定でも何の能力も無い普通の指輪としか出ないのに、異常に心が惹きつけられる！」

そーいや、神がCHRは隠れステータスとか言ってたっけ？

こっちの人には認識出来ないのか

まあ惹かれて当然かもしれないな。

なんたつてCHR+10なんだし

「お願い！この指輪を私に売ってくれない？1万！いえ2万出してもいいわ！」

「2万ですか？」

2万Gってことは、約200万円ってことか？

買ったのは50万円くらいだったから、かなりのぼろ儲けだが。

長年使ってるから愛着はあるけど、これからしばらくはモンスターと戦うんだし、指輪なんてあっても邪魔になるだけか？

俺が渋っていると思ったのか、サラさんは更に値をあげてきた。

「えーい！こうなったら3万でどう？私の貯金のほぼ全部よ。お願い！私にこの指輪を売って！」

すでに売る方に行き掛けていた俺の心は、その言葉で一気に傾いた。

「そこまで言うなら分かりました。3万でお譲りします」

「ありがとう！商談成立ね。はい、3万Gよ。確認して」

「確かに。これで一気に予算が3万に膨れ上がったんですが、どんなのが買えますかね？」

3万もあるのに、今更900の物なんて買う気が起きないじゃん？

「そうねえ、それだけあればウチにある最高ランクのナイフが買えるわよ？」

「ぜひ見せて下さい！」

シーフはSTRが上がり難いんだし、少しでもいい武器を買わない

とな！

「どうぞ。これがウチにある、いえ、恐らく今この町ある最高ランクの武器ミスリルナイフよ」

そう言いながら1本のナイフを差し出した。

「すごいな！重さをほとんど感じない」

「軽いだけじゃないわよ？ミスリル製の武器は鋼製とは比べ物にならないくらいの切れ味を誇るわ。しかもそれだけじゃなくて、なんとミスリルは魔法を纏わせることが出来るのよ！つまりソーサラーが仲間に居てこそ真価を発揮するとゆー訳ね」

「ソーサラーか」

まあ最初から仲間は探すつもりだったし、ソーサラーの重要度が上がったただけだな。

「それで値段はいくらなんですか？」

感動して値段を聞くのを忘れてた。

「2万Gよ。鞘はおまけしてあげるわ」

「わかりました。どうぞ」

「まいどあり」

「残り1万か。これで買える防具はありますか？」

「そうねえ、1万あればかなり良い鎧が買えるけど、君はシーフだしねえ・・・ブラックベアー系の装備はどう？」

「ブラックベアーってさつき食べたやつだっけ？」

聞き覚えがあつたので、隣にいるリリスに聞いてみる。

「そうですよ。ブラックベアーは肉は食用に、皮や牙は武器や防具の素材に使われるんです。かなり凶暴な上に強いので大量に出回ることはありませんが」

「なるほどね。それじゃーそれをお願いします」

「了解。んーと、ブラックベアーのジャケットとズボンとブーツね。全部で9千Gよ」

「ではこれをお願いします」

「はい確かに」

これで残り1500Gか・・・まあこれだけ残ってれば回復アイテムくらい買えるだろう。

異世界生活初日にして、強力な装備を手に入れた俺であつた。

異世界ショッピング（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

誤字脱字がありましたら、ご報告お願いします。

ついでに、評価なんかもして頂けたら嬉しいです。

不定期更新となりますがよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2799ba/>

神の使徒

2012年1月7日03時58分発行